

## 平成 27 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 飯沼 一字先生

飯沼一字先生は、1967 年(昭和 42 年)に東北大学医学部を卒業されて、臨床研修の後 1968 年に東北大学小児科に入局しました。当初から小児の脳神経に関心がありその方向を目指しておられたところ、1971 年に当時の「脳波グループ」の先輩の先生方が全員大学を離れたために、苦労して「神経グループ」の再興を志したとお伺いしております。飯沼先生は 1971 年から開催されるようになった日本小児神経学会主催の小児神経学セミナーに連続して参加し、本セミナーは非常に学ぶところが大きく、「私の小児神経学はセミナーに育てられたと言っても過言ではない」と述べられております。

当時東北大学小児科は荒川教授のもと先天代謝異常の研究が盛んであり、飯沼先生は診断が明らかにされた先天性代謝異常症の脳波周波数と血清アミノ酸レベルの関係などを次々と学会にて報告され、論文にて発表されております。最初の小児神経学会での発表は 1970 年で、演題は「Vitamin B6 依存性けいれんの脳波：自己相関分析による検討」でした。1974 年の日本脳波学会では、先天代謝異常と脳波のテーマでシンポジストを務めております。1975 年にトロントで開催された第 1 回国際小児神経学会では、phosphoribosylpyrophosphate (PRPP) synthetase deficiency の ACTH 療法前後の脳波変化について発表されております。

1977 年から小児科は多田啓也教授が主催され、飯沼先生は 1979 年 3 月に、ハーバード医科大学の Lombroso 教授の下に留学されました。Lombroso 教授はてんかん学・脳波学の権威で、日本からも黒川徹先生、青木恭規先生が留学されておりました。飯沼先生は、当時わが国ではまだ馴染みの薄かった誘発電位や新生児脳波学を学び、1980 年 11 月に帰国後から若手を指導しながら活発な臨床研究を展開しました。

脳波判読では、ボストン小児病院のシステムを導入しました。それは若手が脳波を判読し英語でレポートを書き、それを飯沼先生が後で一緒に見ながら解説しレポートを添削するという方法で、このスタイルは現在も東北大学小児科にて継続されております。1983 年からは、仙台赤十字病院 NICU において新生児脳波の記録が開始され、記録手技の指導と判読を担当する傍ら、多くの若手への指導を行いました。

誘発電位などの電気生理学的臨床研究に加えて、脳画像に関する臨床研究も活発に進めました。一つには、東北大学で 1983 年から臨床研究に応用されるようになった FDG ポジトロン CT(PET)をいち早く小児神経疾患にも応用しました。当時小児科で PET を応用した研究は東北大学小児科のみでした。この成果として飯沼先生は世界に先駆けて Lennox-Gastaut 症候群の PET に関する論文(Ped. Neurol, 1987)を発表されました。同年に同じテーマで論文発表をした Harry Chugani 教授とは長い付き合いを続け、1998 年のスロベニアでの国際小児神経学会では、二人仲良くシンポジウムを担当しておりました。二つ目は、

同じころ東北大学抗酸菌病研究所（現加齢医学研究所）に MRI が導入され、PET と MRI を組み合わせて応用し、脳形態と脳機能を検討した論文を数編発表されました。

飯沼先生は、その後 1988 年に東北大学小児科助教授となり、日本てんかん学会、日本小児神経学会、日本脳波・筋電図学会にて数々の注目される報告を行い、評議員・理事として学会活動も活発にされました。1993 年には、ヒスタミン H1 受容体の PET を世界に先駆けて小児てんかん患者に応用し、てんかん焦点近傍ではヒスタミン H1 受容体結合が増強していることから、中枢ヒスタミン神経系がてんかんという 1 疾患に関連性を持つことを示した論文を *Lancet* に発表されました。

1994 年に東北大学小児科の教授に就任され、多忙な毎日を送られておりましたが、常に若手の指導を心がけ、West 症候群をはじめとする小児てんかん、機能画像解析、臨床神経生理関係での若手による多くの論文の指導をされております。2001 年に第 104 回日本小児科学会学術集会を主催されました。2002 年には第 44 回日本小児神経学会を主催され、Lombroso 名誉教授が新生児痙攣の講演をされました。続く 2003 年に第 37 回日本てんかん学会を主催された折には、元国際小児神経学会会長の Chugani 教授を特別講演の演者として招いております。2003 年から 2006 年までは、日本小児神経学会の理事長に就任し、多岐にわたる学会の活動を統括し、より効率的な研究環境・診療環境を整えるべく奔走されました。小児神経学会の機関紙である *Brain & Development* の impact factor を如何にあげるかにも心を砕いておられました。

飯沼先生は、東北大学小児科教授を定年退職後、石巻赤十字病院院長として職務中の 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災に遭遇しました。地域の拠点病院の院長として、被災者の支援に多大な尽力をされたことは周知の事実であります。石巻赤十字病院院長を退職後、現在は、子どもの村東北の理事長として、里親による被災児童・被虐待児童の養育を進める NPO の活動で国内から海外まで飛び回っております。

飯沼先生のこれまでのお仕事は、現状に柔軟に対処してその場で最良の方向を見出し活動するお姿であり、私たちの人生のモデルになる一つの生き方を示されていると思います。以上のような、てんかんの診療・研究に多大な貢献をされた飯沼先生は、てんかん治療振興財団の研究功労賞の受賞に値するものと考え、ご推薦申し上げます。

宮城県拓桃医療療育センター副院長  
東北大学小児科臨床教授  
萩野谷和裕